

集の方針、母胎はそのままに、第四輯からは更に装いを新たにして、活版によって公刊することになった。鎌倉時代語研究会は、又、昭和五十二年以来、色葉字類抄を中心とする当代の語彙蒐集をも続けて来ている。幸い、先般文部省科学研究費を拝受する機に恵まれて、その成果の一端を別に発表し、更に広く多くの諸賢の御誘掖を仰ぐべく力めても来た。

鎌倉時代語の研究に至る入口は、種々あるであろう。われらのこの歩みは、基礎作業を志向しつつ行う、その僅かな一つの、試みの集いに過ぎない。しかし小さな一つ一つの積重ねこそ、斯の道には必要であろう。本誌が、新しい分野を開拓するための、土壌作りの役に立つことを秘かに念じ、且つ、多くの他の入口よりする研究が様々に現れ、実ることを期待するところである。

昭和五十八年三月

小林芳規

目次

巻頭言

高山寺蔵『五教章上巻聞書』について

——あわせて明恵関係片仮名交り文資料の類別案に及び——

柳田征司……………一

先徳略名口決・作名について

松本光隆……………五

「然而」をめぐる

鈴木恵……………三

『草案集』の用字に関する一考察——副詞による検討——

田中雅和……………七

高山寺蔵古訓点資料に於ける、「類同・例示」等の表現法

佐々木峻……………九

西方指南抄における助動詞——「キ」と「ケリ」——

井上親雄……………二〇

凶書寮本類聚名義抄における玄応一切経音義引用の態度について

……

原卓志……………二四

高山寺蔵理趣経鎌倉期点解説並びに影印

山本秀人……………二四

解説

沼本克明……………二八

影印

……………二九

栄花物語語彙索引稿(四)

……………高知大学人文学部国語史研究会……………三七

卷 第 六	三三
卷 第 七	三五
専修寺蔵本	
『三帖和讃』本文語彙総索引稿	三五
新潟大学教育学部鎌倉時代語研究会	
会員近著紹介	四七
鎌倉時代語研究集会記録	四八
「鎌倉時代語研究」(第一輯～第五輯)目次	四三
後 記	四五

高山寺蔵『五教章上巻聞書』について

——あわせて明恵関係片仮名交り文資料の類別案に及ぶ——

柳 田 征 司

目 次

- 一、はじめに
- 二、『五教章上巻聞書』
- 三、明恵の注釈書と講義聞書、ならびにその流れをくむ資料
- 四、おわりに

一、はじめに

筆者は、室町時代に盛行した抄物の源流を求めるといふ立場から、抄物の時代に直前するところの鎌倉時代の注釈活動と講義聞書とに注目し、特に、資料が豊富で、また講義と聞書作成の実態がかなり具体的に把握できるものとして、明恵の講義とその聞書をとりあげてきた⁽¹⁾。

本稿は、高山寺経蔵に伝存する片仮名交り体の注釈書『五教章上巻聞書』が明恵の講義の聞書であることを明らかにしようとする。そして、これを機会に、この資料を含めて、今までにとらえることの出来た明恵の講義の聞書を中心に、さらに広く明恵関係片仮名交り文資料を全体として類別整理する一案を提出して、鎌倉時代語研究に資せんとするものである。

- (2) 高山寺聖教第七三函の異水「蓮顯授与禪遍許可印信」・「不用別壇神供作法」・「新爐加持」・「仁王近」・「五大近」・「文殊千鉢法」・「(ca ni ti ta) 所作 (ca nate) 准之」・「五秘密近」・「毎日御所作次第」・第八九函の異水「不動止雨」・「大勝近」などによる。
 - (3) 高山寺聖教第八九函の西院八結「不動略次第大御」・「大威徳」・「金剛夜叉」などによる。
 - (4) 「群書解題 釈家部 釈三五八 先徳略名口決」
- 〔付記〕 本稿は、昭和五十七年度鎌倉時代語研究会夏季研究集会において発表した内容に加筆成稿したものである。研究集会の席上、又本稿成稿に当っては、小林芳規先生、菅原範夫氏、菅原範夫氏、鈴木恵氏の御教導、御教示を賜った。記して感謝申し上げる。又、資料閲覧に際しては、東寺観智院金剛蔵聖教調査団、高山寺典籍文書総合調査団、国立国会図書館、東寺御当局、高山寺御当局の各位の御高配を賜った。お礼申し上げます。

「然而」をめぐって

鈴木 恵

目次

- 一、はじめに
- 二、「然而」の意味用法
 - I、「然而」の語義
 - II、正格漢文に於ける「然而」の意味用法
 - 三、和化漢文に於ける「然而」の意味用法——順接より逆接へ——
 - 四、訓点資料に於ける「然而」の加點状況
 - 五、逆接の意味用法の成立要因
 - 六、むすび

一、はじめに

今日の和化漢文研究は、用字法研究を中心として進められ、その進展に伴い、様々な言語事象が明らかにされつつある。しかし、研究対象に資料的偏りが見受けられるのも事実である。とりわけ、古事記と御堂関白記を中心とした平安時代記録資料とにその関心が集中し、両者個々の研究は格段の進歩を見るのであるが、文章の性格に多少の相違が存するという理由によって、両者を直接に結び付けて考えることはあまり行われていない。即ち、一口に和化漢文と称するものの、実際には多様な文章が見られるからである。和化漢文研究に通時的観点が不足しがちな理由は、ここにもあるものと考えられる。

「然而」をめぐって